

「特集 建設分野の魅力」 第3回

災害の記憶を胸に

合計約55キロの河川を5年という短期間で復旧・復興させるという使命を受けた県の土木担当者と協力した町の担当者たち。県内で過去に実施された河川の復旧・復興工事の中でも異例のスピードが求められる中、どのような困難に直面し、どのように克服したのか。当事者に語ってもらった。



2009年夏、佐用町周辺を襲った台風9号による豪雨は佐用町で死者18人、行方不明者2人という大きな災害をもたらした。その後、千種川、佐用川を中心に「合計約55キロの河川を5年で復旧・復興する」という計画を策定し、緊急河道対策事業が実施された。現在は河川断面を広げるだけでなく生態系や景観にも配慮した河川に生まれ変わりつつあり、15年度内にほぼ全ての工事が完了する。事業に携わった土木行政担当者や建設業者、住民が、被災時から復旧・復興までの軌跡を振り返った。(取材協力)兵庫県建設業育成魅力アップ協議会

当時の職員への対応

―当日の状況から
押田 9日の夕方、自宅は床下に水がどんでん入ってきている状態で、水防業務の出動前に妻の実家のある龍野に子どもを避難させようと思ったが、既に道路が冠水していたため引き返し、避難指定場所の公民館で一晩過ごした。翌日の朝早くに現場に駆け付けたが、床上浸水のためパソコンも壊れた。泥だらけの執務室の復旧も急務だったが、各市町から駆け付けてくれた給水車の先導に追われた。山本 9日は仕事で河野原地区に向いていた。見る見るうちに堤防に水が迫ってきて、国道と地

土木行政関係者座談会

―区を結ぶ唯一の橋を渡って戻ることができなくなってしまう、周辺で一番浸水しにくい河野原駅へ向かった。早朝になって少し雨が落ちていたので地区の様子を見に行くと、橋に木が突き刺さり、堤防がえぐれているのも見えて背筋がぞっとした。深津 被災当時、県庁の河川整備課で水防業務に当たった。当日の雨量レーダーでは佐用町だけでなく宍粟、朝来市の辺りも大量の雨が降っており「これは大変なことになるかも」と思った。その直後から、浸水や破堤の報告が入ってきたのを覚えている。翌日、現地の土木事務所から写

山本氏 橋に刺さる木、えぐれた堤防

真などを添付した情報を待っていたが、なかなか届かず、不安になった。後で聞くと、被災した道路や路面に流木が散乱し、通行不能の道路が多いほか、電話、電気、ガスなど災害復旧工事に向かう車両などで想像を超える渋滞が発生しており、現地に調査に行こうにも行けない状態だったと聞いた。押田 ごみの処分も大変だった。被災した家屋から出る大量のごみが家屋前の道路に出され、道路の通行が確保できないほどだった。町ではひとまず公民館などの敷地にごみを仮置きしたが、想像以上のごみの量で広大なヤードの確保に追わ

兵庫県西・北部豪雨 2009年8月9日の台風9号が発生した豪雨(佐用観測所の24時間雨量で最大326.5ミリ、時間雨量81.5ミリ)により、千種川、佐用川などが氾濫。県内で死者20人、行方不明者2人、全壊、床上浸水などの被害家屋は約2900戸に上った。

5年計画で計55キロ異例のスピードで復旧へ

工事への思い

―合計約55キロに及ぶ被災河川の復旧・復興の目標を5年とした背景は、深津 県内の土木事務所勤務する多くの職員が、災害直後に佐用町に新たに設置された「河川復興室」に集められ、「職員全員が絶対やりきる」という強い気持ちを持って、災害時の団結力、集中力はものすごいものがあると感じた。

藤田 当時、現地の土木事務所職員として勤務していたが、これだけの大掛かりな工事を5年でやりきるな



庵川の護岸工事を進める重機。地域住民と行政が協議を重ね、生活に支障がでないよう配慮もなされた＝佐用町庵地区

深津氏 職員一丸「絶対にやりきる」

工事箇所12の土木業者を同時に1年渡す限り重機がひしめいてるような状況だった。現場では大きな

竹川氏 大量の重機 周辺住民に配慮

田村氏 自然豊かな生態系 守りたい

藤田氏 家屋移転 住民の協力で成功

音が発生し、多くのダンパーやトラックが走る。周辺の方に極力迷惑がからないように気を付けた。月に1回、地元の集会所で協議を開き、不安に感じていることなどを集約し、対策をとった。通勤、通学、帰宅時間帯にダンパーは走行しないなどの制限も設けた。田村 主に上郡町内の千種川の工事を担当している。地元の方々には川とともに生活をしてきているので、川に對する思いが強いことを実感した。堤防をかき上げ、川を広げ、掘ることで水害から守ることも大事だが、川に親しみやすく、また清流ならぬ豊かな生態系を守ることも重要な地元の人の声から教えられた。もともと生えていたヨシなどもいったん別の場所に移してから戻し、川の中に魚がすむやすいよう瀬や淵をつくることなども考えた。アユ漁をしてもいい。生きている川でもあって、活の川でもあるので、工事の影響で水が濁らないよう気をつけた。竹川 限られた期間の中で工事だったのだから、とにかく「いかに水を流すか」という治

水面にはけり気が向いていて時期があった。でも工事を終えた川を見て「あれ、これって川なんか。川にするにはどうしたらいいのかな」と考えた。そもそも千種川、佐用川ってどんな川だったんだろうかと関心を持ち、川らしさを取り戻すためにどうしたらいいかを考えるようになった。―河川を広げるための地権者との用地交渉は大変だったのでは？ 藤田 多くの死者・行方不明者を出した災害に直面し、二度とこのようなことが起こらないようにしたいという強い思いを感じた。その思いを引き継いで工事を完了させたい。岩谷 県の土木行政担当者の間には昔から「土木一家」という言葉がある。ひとたび何かあれば結束してチーム力で向かっていくし、達成したときの喜びも知っている技術者たちの集まりだ。河川の改修においては、安全・安心な川をつくるだけでなく環境や景観にも配慮した川づくりを進めてきた。特に平福や久崎地区では、住民からの意見を改修に反映し、以前にも増して自分たちのまちに誇りを持つてもらえるようになったと自負している。災害から約6年がたち、間もなく改修を終えるが、地域の防災意識を低下させないようにしなければならぬ。安全に絶対はない。兵庫県では全国に先駆けて「総合治水条例」を制定した。その中で「流す」「貯める」とともに「備える」との大切さを説いている。いざというときには、自分の命を守るために「逃げる」ことを考えてほしい。

これからの展望

―あらためてこれまでを振り返ってどのような思いがあるか。

押田 災害直後に建設課に異動となり、県の土木職員と地元住民との交渉ができた。円滑に進むように、あらゆる場合同行した。それが佐用町の職員の使命だと考えていた。初めのころは住民の方から厳しい言葉をかけられ、不安に思うこともあったが、県の方が誠心誠意説明し、工事によって川がどンドンよくなっていくにつれ、住民からの信頼が厚くなっていくのを感じた。

押田氏 住民からの信頼 徐々に厚く 岩谷氏 防災意識 低下させたくない

山本 上郡町では04年9月の台風21号で現場付近も大きな被害を受けた。だが、その後の河川改修工事以降は水があふれることがなくなった。今回の工事はその上流部で、まだ全体が安心に暮らせるようになったことを住民は実感していると思う。

田村 土木事務所に来て2年半だが、災害直後から復旧・復興に携わってきた先輩方の話を聞き、あらため

て強い思いを感じた。その思いを引き継いで工事を完了させたい。岩谷 県の土木行政担当者の間には昔から「土木一家」という言葉がある。ひとたび何かあれば結束してチーム力で向かっていくし、達成したときの喜びも知っている技術者たちの集まりだ。河川の改修においては、安全・安心な川をつくるだけでなく環境や景観にも配慮した川づくりを進めてきた。特に平福や久崎地区では、住民からの意見を改修に反映し、以前にも増して自分たちのまちに誇りを持つてもらえるようになったと自負している。災害から約6年がたち、間もなく改修を終えるが、地域の防災意識を低下させないようにしなければならぬ。安全に絶対はない。兵庫県では全国に先駆けて「総合治水条例」を制定した。その中で「流す」「貯める」とともに「備える」との大切さを説いている。いざというときには、自分の命を守るために「逃げる」ことを考えてほしい。

県西・北部豪雨 復旧・復興工事を振り返る

ふるさとを川守る

大量の土砂で寸断された国道373号。自主的に障害物を撤去した建設会社もあった(佐用町提供)



当時の状況を語る「横山基礎工事」の北野土木部長



「横山基礎工事」土木部長
北野 正良氏に聞く

2009年8月9日 復旧の道筋を付けるた
の豪雨では、佐用町真盛地区の本社社屋も浸水被害にあった。近所で堤防が切れて道路に土砂が押し込まれてきた。被災地は、道路が通れないことには復旧が進まない。翌10日の朝から自主的に社屋近くの道路を中心に、重機を使って土砂を取り除く作業に当たった。重機を持っていくなどの建設会社も同じ思いで行動したと思う。数日後、兵庫県建設業協会姫路支部から応急復旧工事の依頼を受けた。当社は支部の幹事だったので、佐用町の窓口役を担った。

まず被災現場を見て回り、現場ごとの必要な重機と資材が必要かを判断し、各業者にも依頼した。災害直後は行方不明者の所在が判明していなかったため、警察から「河川の竹やぶの中や土砂崩れの土の中に不明者がいるかもしれないので慎重に工事を進めるように」との指示があり、時間的制約がある中、細心の注意を払

未曾有の災害から復旧・復興に向けて、地元の建設業者は直後からどのように動いたのか。また、古くから川とともに暮らしてきた地域住民は、復興の川づくりにどのような思いを込めたのか。仕事に、町に誇りを持って生きる人たちの話を聞いた。

地元業者、住民に聞く

上郡町河野原地区元自治会長
山田 正氏に聞く
2004年にも水害で「全員で前を向いて」と一致団結し、河野原地区はほとんどの家屋が床上浸水の被害に遭った。千種川は下流から河川整備が進んでおり、河野原地区でも川幅を広げる工事が進んでいる。台風9号はそのさなかの被害だった。当日もあつという間に床上まで浸水した。深夜0時くらいに町を流れる水の様子が変わり、堤防が切れたことが想像できた。翌朝になって自治会の役員が集まって被害状況を調査。国道373号につながる唯一の橋も、流木が引っかけたことで通行できず、集落が完全に孤立したことを知った瞬間でもあった。用水路も埋まってしまった。寄り合いを開い



2日目は手空いている人たちが自主的に米を持ち寄り炊き出しを行い、33軒ある住戸に対して1人当たり2食分の食料を提供した。11月ごろに県から説明があり、河野原地区

炊き出しなど、住民が互いに手助けした体験を語る山田さん。大規模な河川改修が行われ、橋も新しく架けられた上郡町河野原地区

「全員で前向こう」と団結

をを含む合計約55キロの河川工事を行う計画を聞いた。川工事を行う計画を聞いた。安心したことを覚えていた。千種川の流域の中で、従来約70メートルの川幅が狭い地域だったのが、改修工事のおかげで川もゆたやうに流れようになった。このため川沿いに家を構える9軒のうち7軒が用地買取りの対象となった。高齢者が多く、残りたいと希望する世帯が多かったが、皆さんの理解と協力的のおかげで、全ての家が河野原地区内で

改修でまちに活気戻った



安全を心掛け慎重に工事 「ありがとう」の声励みに

つての作業だった。川の水が増える出水期の6〜10月には河川内の工事ができないので、残りの11〜5月で集中的に工事にかからなければならなかった。町中を一気にタンクローリーやトラック、重機が走るようになるので、事故を起こさないよう安全を心掛けて運転するように各社で徹底した。現場に行くたび、地域の方から「早く工事を終わらせてほしい」との要望を聞いた。作業を終えて「ありがとう」といわれることがやりがいになるし、こうして自分たちで手掛けたものが多くの方の生活基盤になって、皆が安全に暮らせるようになったことを思うと、地域に少しでも役立てたのかなと感じられる。



佐用町久崎地区元自治会長
三宅 賢二氏に聞く

佐用川の堤防が崩壊して浸水した久崎地区。171世帯のうち9割が床上浸水した。河野原地区に通じる唯一の橋が被災、車両の通行が不能になり孤立状態となった

久崎地区は下流で千種川と佐用川が合流。台風9号の当日は午すので雨の時に水かさが増えやすく、こすい雨が降り出し、れまでも1964年。朝から降り続いて76、2004年と大いたので川の水位が大きな水害を受けてきなり上がった。過

去の経験も踏まえ、15人の隣保長と消防団に招集をかけた対策本部を立ち上げた。1軒ずつ訪ねて避難を呼び掛け、避難できない人は自宅2階に移るように声をかけた。避難所の久崎小学校には約120人が集まり、老人福祉センターには1人暮らしの高齢者らが集まっていた。その後、センターでは1・5メートルの高さまで浸水し、2枚重ねで敷いてあった畳が浮いた。地区171世帯のうち、9割が床上浸水だった。佐用川は地域の人の「さよがわ」と呼ばれ親しまれている。地区の住民は、昔から川とともに生活してい

ふるさとを風景取り戻す

た。高瀬舟を利用していたし、夏場は川をテール代りにして泳いでいた。なので、災害直後に県の方から河川改修を行う報告があったときには「川をわれわれから遠ざけないように」とお願いした。3年前には、住民が集まって川を考えるワークショップを開き、川と親しめる広場や遊歩道整備など、地元の意見を取り入れられた。ふるさとの風景を取り戻したいとの思いがあり、流失した桜を川沿いに植えることにし、14年3月には久崎小学校の児童らによる植樹会を開いた。一部完成している遊歩道は現在、毎日の



久崎小学校の児童らが植えた桜の成長を眺める三宅さん(左)。川と親しめる広場や遊歩道が整備されている=佐用町久崎地区

教訓地域で引き継ぎたい

佐用町平福地区「平福文化と観光の会」会長
原田 昇氏に聞く

台風9号では平福地区一帯も、ほとんどが床上浸水の被害に見舞われた。周辺は江戸時代に宿場町として栄え、御殿屋敷跡や大正期以前の建造物が残る地区。佐用川の川端にも昔の風景が残っているが、その中でも景観を形作っている瓜生原家の住宅も浸水した。所有者から「この際だから取り壊したい」と連絡があったが、町並みも「歯抜け」にならないと考える「平福まちづくりの会」を組織し、結果、瓜生原邸は町に寄付されることにな

江戸時代の遺構を護岸に 昔からの姿守り観光客増

り、それを「平福文化」と観光の会」で管理することになった。さらに、新たなことが決まった。現にできる左岸の管理用には若い女性たちのグ ループが喫茶店の運営に当たっている。併せて「日本ナショナル」からサポートを受け、平福の歴史と文化について地区の高齢者に話を聞いて回り、冊子にまとめた。佐用川の改修に当たっては、県に対して地元からも意見をいくつか出させてもらった。その結果、川幅は約5メートル、護岸にはコンクリート製でなく、自然石を使った石積み護岸が誕生した。また、蔵文化財調査で江戸時代初期の堀と石垣の遺構が発掘されたことか、その石垣を護岸のみにして



洪水の痕跡(色が変わっている所)を指し示す原田さん(右)。地域住民が話し合って、存亡の危機にあった瓜生原邸を存続させることに成功した=佐用町平福地区



約200人が参加した遊歩道の完成イベント。散策のための周遊コースも整備された